

医会からのメッセージ

ようこそ神奈川県皮膚科医会へ!

このページは、医会のホームページからの転載です。ご一読ください。

皮膚科医の方へ

会則にもありますように、われわれの医会は神奈川県内で診療や研究などに従事する皮膚科医が中心となって組織されています。すでに会員として様々なアクティビティーに参加されておられる方とは、引き続き「ともに学び、ともに楽しむ」医会ライフをエンジョイしましょう。例会などに参加されない会員には事情がおりでしょうし、神奈川県におられながら未入会の皮膚科医は当医会の存在をご存じなかったのかもしれませんが。学問にとどまらず、実地診療で遭遇するさまざまな疑問や問題点、さらには一般生活にいたるまで仲間と話し合う場が医会です。情報を交換して、知識を増やし、技術を高め、感性を研く。活動はあくまでも個人の自由意志によるものですが、共に自らを磨き、律する心を養おうではありませんか。

皮膚科以外の医師や歯科医、薬剤師、看護師など医療に従事される方々へ

医会は学術団体であり、皮膚科医の親睦や共益を図るためだけに存在するものではありません。医療を通して社会全般に貢献することを目指しています。皮膚科医のレベルアップを目指した研修機会を設ける一方で、往診をはじめとした在宅医療や学校専門相談医など地域医療にも積極的にかかわっています。さらに、様々な分野からの皮膚科講師派遣要請に応える体制を整えました。看護や介護などの職種からは、「皮膚がQOLを維持する大切な臓器であること」「子供から高齢者まで各年齢に応じたケアの仕方があること」は分かっているが、詳しく具体的に教えてほしい、歯科を含めた他科の医師からは「金属アレルギーなど、原因のみつけ方を教えてほしい」などといった要望が寄せられますが、講師を探せない地域もあるようです。医会では“広報委員会”・“在宅医療委員会”・“学校保健委員会”を中心に最適な講師を探して派遣いたしますので、どうぞ遠慮なくお問い合わせください。

製薬業界や医薬品流通業界の方へ

法人会員の方々には、総会や例会のご案内に加えて、機関誌「神皮」などで医会の活動を報告しています。また、年に3回開催している例会は皆様にとっても有益な内容が企画されていることと思います。共催されるとき以外でも法人会員として遠慮なく参加していただき、医会の活動が皆様同士や皆様と皮膚科医の共通認識を培う機会になればと思います。また、皆様が開催されるさまざまな講演会や勉強会は重要な生涯学習の機会であり、より有意義なものになるよう企画段階から協力させていただきたいと考えています。

最後に“われわれの活動や考え方”をもっとも伝えたい一般の方々へ

皮膚は肉眼で見える臓器ですから、異常があれば誰の目からも分かります。ということは、何かが起こったときに必要なのは血液などの検査よりも、まず熟練した医師がじっくり詳細に診察することなのです。神奈川県皮膚科医会では、皮膚科医に求められる“眼”を養い、知識を増やし、技術を向上させるための生涯教育に力をいれています。皮膚に何かが起こったときには、迷わず皮膚科医を訪れてください。

皆様に、皮膚のことをもっと知っていただきたいと思います。皮膚は内臓に起こった病変を表すことがあり、「内臓の鏡」ともよべれます。皮膚の変化が手がかりになって、重大な内科疾患が発見されることがありますが、なんと内科の症状よりも皮膚症状のほうが先に出ることもあるのです。一方で、全国の高齢者を調べた結果、湿疹や感染症などによる皮膚のトラブルが“QOL”を大きく悪化させているというデータがあります。内からも、外からも、皮膚とは上手に付き合っていたいただきたいと思います。

医会では市民の皆様が皮膚に関する正しい知識と対策を理解していただくために講演会を開催する一方で、勉強会などに講師を派遣するシステムをつくっています。ご希望があれば適した講師を紹介することが可能ですので、気軽にお問い合わせください。また、寝たきりや介護力の事情から通院できずに皮膚病で悩んでおられる場合は、ホームページの地域別「往診皮膚科医リスト」から探してください。

神奈川県皮膚科医会は、“皮膚のことは皮膚科に任せなさい!”と胸を張って言えるように、新しい知識や技術をはじめとした皮膚科の研修と医療の向上に努めています。そして、生まれてから生涯続く皮膚との付き合いを通じて、皆様の健康生活を応援してゆくために活動しています。

巻頭言

*

医療崩壊と女性医師



溝口昌子

米国のオバマ新大統領が、医療、教育、エネルギーの3つを最重要課題であると明言したのを聞き、日本にもオバマの様な政治家がいればと思ったのは私1人ではないでしょう。

日本の医療費の対GDP比は先進7カ国中最下位です。教育機関への支出のGDP比は米国、英国、フランス、OECD平均、ドイツに次いで6位で、特に公的支出が少ないと報じられています。最近の新聞を読みますと医療崩壊とともに教育崩壊も既に始まっていることは明らかです。石油などの資源に乏しく、勤勉で優秀な人材こそが唯一の資源である日本の将来が心配になります。

医療崩壊に繋がる医師不足に関して、女性医師が職場に定着しないことが原因の1つであると言われていています。医療界に限らず全職種の女性就業率を見ますと、出産・育児に関わる30歳代前半を中心に女性の就業率が落ちてM字型カーブを示します。これは欧米には見られず、男女共同参画が進まず出生率の低下が問題になっている日本と韓国に見られる現象です。一般職の女性の出産後就業率は出産前の約30%しか就業していないのに比べ、女性医師は一番低い時でも就業率は約75%に留まっているのは専門職の覚悟の現れと見たいのです。この時期の男性医師の就業率はほぼ95%を維持していますが、医師免許取得後35年を過ぎますと男女の就業率は逆転します。女性の方が丈夫で長持ちですから、長い目で見れば就業率の男女差は言われる程ではありません。

残念なことに、医師としての知識を吸収し、技能を磨くべき時期が、子育ての時期と重なります。仕事上、周囲から頼りにされる時期と子どもを手塩にかけて育てたい時期が重なるのです。本来喜びであるはずの出産・育児が女性医師のキャリアを積みた時期に重くのしかかってきます。結婚しなくても、子どもを産まなくても以前程「とやかく」言われなくなり、仕事第一を希望する女性医師が増えても不思議ではありません。

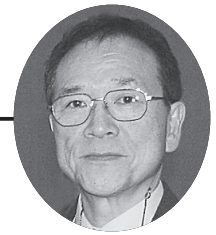
法律上は、出産・育児のために休暇が取れるようになっていますが、殆どの病院は休暇を取らせる余裕がありません。忙しい他の医師に負担がかかるのを恐れて退職せざるを得ない状態と考えます。代替教員のような代替医師の制度を作るべきです。定年退職した医師でも外来位はできます。使いにくいかもしれませんが、私にも代替医師を志願する意志があります。

神奈川県皮膚科医会に出席しますと、和気あいあいとした雰囲気になります。皆様のご多忙の中役割分担され、交流を楽しみながら上手に会を運営されている様子を嬉しく拝見しております。女性医師支援室を立ち上げ、離職した人の再教育も目指しておられます。女性医師の支援はいつまで必要でしょうか。「男性医師が育児休暇を取るようになり、男性医師支援室が必要になるまで」なんて申しません。医師全体がゆとりを持って診療できるようになるまでです。

所感

所感 2009

栗原誠一



新しい仲間が次々と加わり、われわれの医会は正会員540名を超えるまでになりました。名簿管理を担当する幹事と事務局の瀬尾志津江さんは、沢山の仕事量に(嬉しい)悲鳴を上げる間もないことでしょう。一方では、例会ならびに季節の講演会を準備して開催するために多くの幹事や委員が、まさに身を削って勤労奉仕をしています。それに加えて執行部が、在宅やフットケア、産業医、IT、学術・サーベイランスなど各種委員会に対して、勉強会を開催することや臨床研究データの作成を求めるのですから、医会全体の仕事量は並大抵のものではありません。

忙しさに不満や苦情があるでしょうが、信念を持って活動を続けたいと思っています。もとより医会は会員のために存在し、親睦を図り知識の増進や技術の向上に努める職能集団としての目的があります。皮膚科医の存在意義を高め、皮膚科医であることを誇れる環境をつくり維持することも必要でしょう。それと同時に、皮膚科医ならではの知識や能力を使って、積極的に社会に働きかける、市民の健康をまもるという使命も与えられていると思います。医会はさまざまな機会にその任を果たしていますが、昨年からはじめた新しい取り組み「足の健康チェック」について、企画された経緯と活動の目的について紹介させていただきます。

足のトラブルはQOLの維持に大きくかわり、ことに高齢者や糖尿病患者で問題になることは医療従事者に共通した認識です。そしてその“足”を診察するのは皮膚科医が最適であると確信して、在宅医療委員会の中に「神奈川フットケア研究会」が発足しました。2006年2月に第1回の勉強会を開催

してこの分野を皮膚科医がリードする意気込みでいたところ、同年秋に日本医師会・日本糖尿病対策推進会議から、やけに目立つ黄色地に赤文字の糖尿病足病変の啓発ポスターが届いて驚きました。そこに皮膚科医が全く関わっていなかったのです。足トラブルの診療経験に乏しく、視診・触診に慣れていない医師ばかりに任せておくわけにはいきません。対応を考えていたところ、有り難いことに、足病変に興味を持つ篤志の会社が企業宣伝なしで手助けをすると申し出てくれたのです。さっそく山田裕道幹事を責任者として浅井寿子、大澤純子、山川有子によるチームが結成され、うす桃色のハイセンスなポスターを作って“足のトラブルは皮膚科医に任せなさい”とメッセージを発信することが企画されました。「足の健康チェック」月間を設けて患者さんの足をチェックした結果をまとめ、昨年の日臨皮臨床学術大会で速報的に発表し好評を博しました。その後も引き続いて2回の調査月間がありましたので、疾患とアンケート調査の結果が楽しみです。しかし、実は結果以上に、待合室あるいは診察室に医会のポスターを掲げる、そのこと自体に格別の意義があると思っています。現在は幹事から有志を募っての限られた活動ですが、会員すべての施設にポスターが掲示されて、それを見た市民がいつでも気軽に相談する雰囲気が生まれてくれれば素晴らしい社会活動になります。

皆で協力して“皮膚に何かあったらまず皮膚科医に見せよう”、“皮膚のことは何でも皮膚科医に相談しよう”と当たり前のことをアピールしようではありませんか。